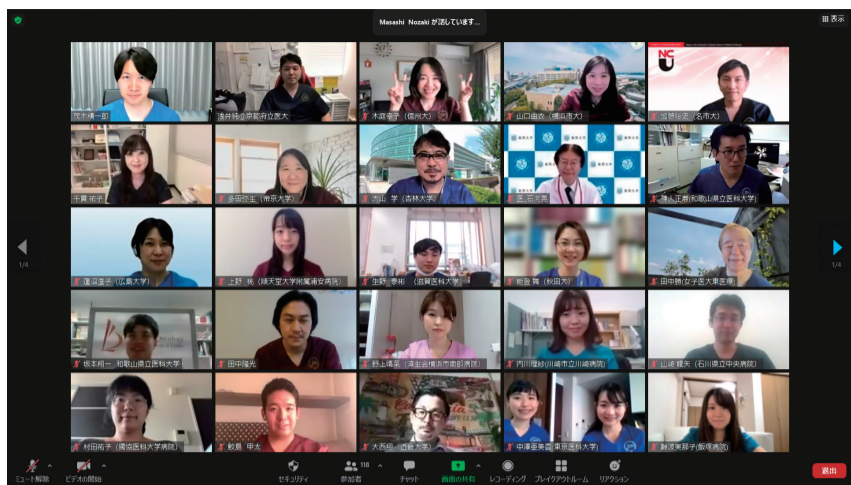


特集4

第6回皮膚科サマースクール
2021を終えて

2021年9月20日(月)に第6回皮膚科サマースクール2021を開催いたしました。これまでの皮膚科サマースクールは北海道留寿都村という大自然の中で、医学生や初期研修医の先生に講演や実習を通じて皮膚科の魅力を実感していただいておりますが、新型コロナウイルス感染症の拡大が続くため、本当に残念ではありませんが、対面での開催は困難と判断し、ウェブでの開催といたしました。これまでの2日間のスケジュールを1日とし、さ



らに時間を短縮するために一つ一つの講義時間を短縮することとしました。結果的には短時間であったため、画面越しであっても飽きることなく最後まで集中して講義を聴講していただけたのではないかと思います。オンラインになってしまったため、皮膚外科実習を行いませんでしたが、参加形式のクイズやディスカッションによって盛り上がり上げていただけたと感じています。講義のみの短い時間にはなりましたが、皮膚科の魅力がぎゅっと詰まった濃い内容になり満足いただけたと思います。

まず、ダーモスコピー、皮膚アレレルギー、乾癬、白癬、悪性黒色腫、接触皮膚炎、レーザー、皮膚外科など様々な分野でご活躍されている先生方の楽しいレクチャーを聴講して、多岐にわたる皮膚疾患の特徴や最新の治療法を学んでいただきました。また、保険制度や皮膚科専門医制度、研究や留学を含めたキャリアパスなど普段なかなか聞けない内容も聴講いただきました。ランチ交流会では、各グループに分かれて、普段なかなか話ができない第一線で活躍している先生方とランチを食べながら(実際は食べられなかったかな?)雑談する時間を設けました。午後には、事前に投票ができるアプリをスマートフォンにダウンロードしていただき、オンラインでも全員参加ができる「皮膚科症例クイズ」を行いました。途中でうまく動作しなくなるというアクシデントがあったものの、我々皮膚科医でも知らないような皮膚疾患にまつわる問題を楽しんでいただき、さらに上位入賞者にはダーモカメラなど豪華な賞品もプレゼントされました。また、皮膚科Q&Aは、事前に募集していた参加者からの質問に対して答える形式で行いました。「皮膚科に入学した決め手」「皮膚科専門医取得への困難」「入局後のキャリアパス」「A1やオンライン診療による今後の皮膚診療の変化」などかなり本格的な質問内容に対して皮膚科の先輩医師が答えました。

来年度は現地開催によって、参加者と対面できることを願っています。皮膚科に興味を持つ初期研修医の皆様をぜひご推薦いただければと存じます。次回の開催日は、2022年7月17日(日)〜18日(月・祝)です。

スタッフ(敬称略、五十音順)
講師・チューター
五十嵐敦之、石河 晃、坂本翔一、田中隆光、田中 勝、千貫祐子、常深祐一郎、外川八英、能登 舞

実行委員
浅井 純、大山 学、加藤裕史、木庭幸子、神人正寿、高山かおる、多田弥生、蓮沼直子、茂木精一郎(委員長)、山口由衣



執筆者

第6回皮膚科サマースクール
2021実行委員長

茂木 精一郎

群馬大学大学院
医学系研究科皮膚科学 教授

Column

「ありきたりな」キナーゼ

(執筆者) 菅谷 誠 国際医療福祉大学 皮膚科学 主任教授

分子標的薬が炎症性皮膚疾患に使用されるようになった。JAK阻害薬が乾癬性関節炎やアトピー性皮膚炎に認可され、今後さらに多くの疾患でも使用されることが期待される。

JAKは発見当時、Just Another Kinaseと呼ばれたらしい。Just Anotherとは「ありきたりな」という意味である。「新しいキナーゼが見つかったけれど、たいしたことないだろう」と思われたそうだが、今日では、その重要性に疑問をはさむ余地はないであろう。

皮膚科と神経内科はステロイドだけ処方していればいい、などと揶揄されたのは過去の話である。疾病ごとに重要なサイトカインやシグナルを同定し、生

物学的製剤や分子標的薬でピンポイントに治療する時代になった。これらの薬は治療効果が高い反面、さまざまな感染症や間質性肺炎などの副作用を起こすことがある。また適応ではない皮膚疾患に使用した場合、病勢の急速な悪化を引き起こしかねない。正確な診断が、これまでも増して重要である。

何だか偉そうな書き方をしているが、私も「ありきたりな」皮膚科医にすぎません。誤診をしないように、また患者さんから信頼されるように、とにかく自分の家族を診るつもりで診察するように心掛けています。後輩の手術を指導しながら、「自分の母親だと思って縫いなさい」と言ったら、患者さんから、「先生、私はそんな年寄りじゃないよ!」と怒られました。まだまだ修行が足りません。